レギュラシオンの政治経済学

山田鋭夫（名古屋大学・名誉教授）

TOSHIO YAMADA

TYAMADA@RAINBOW.PLALA.OR.JP

現代公共政策学会賞受賞記念講演

日本政治法律学会2021年度春季研究大会

オンライン　　2021.5.15

話の構成

１　はじめに――コロナ・パンデミックのなかで

２　可変性の政治経済学

レギュラシオン理論の形成　フォーディズムの成長と危機
資本主義の可変性をどう把握するか　調整と危機の理論

３　制度の政治経済学

制度が重要である　制度変化の諸類型　制度階層性と
社会政治連合　支配的政治連合の組替えの背景

４　おわりに――ポスト・コロナの経済社会

コロナ・パンデミックの歴史的位置　人間形成型発展の可能性？

1　はじめに――コロナ・パンデミックのなかで

特徴的言説

・これは一時的攪乱に終わらない

・もう元（Before Corona)には戻らない

・新しい日常(New Normal)が始まる

特徴的状況：対策・効果は各国まちまち

・自由制限／感染抑止：中国・シンガポール

・経済優先／感染爆発：米（トランプ政権）・ブラジル

・健康・経済両立／感染波反復：EU・日本？

・もう元には戻らない

→大いなる歴史的変化への予感

→資本主義の時間的可変性

・感染対策・効果の多様性

→同一の脅威（危機）に対して各国別対応は多様（「健康・経済・自由のトリレンマ」での選択）

→資本主義の空間的可変性

➡**可変性の政治経済学**へ：レギュラシオン理論

（静態的・普遍主義経済学＝新古典派への批判と挑戦）

２　可変性の政治経済学

レギュラシオン理論の形成

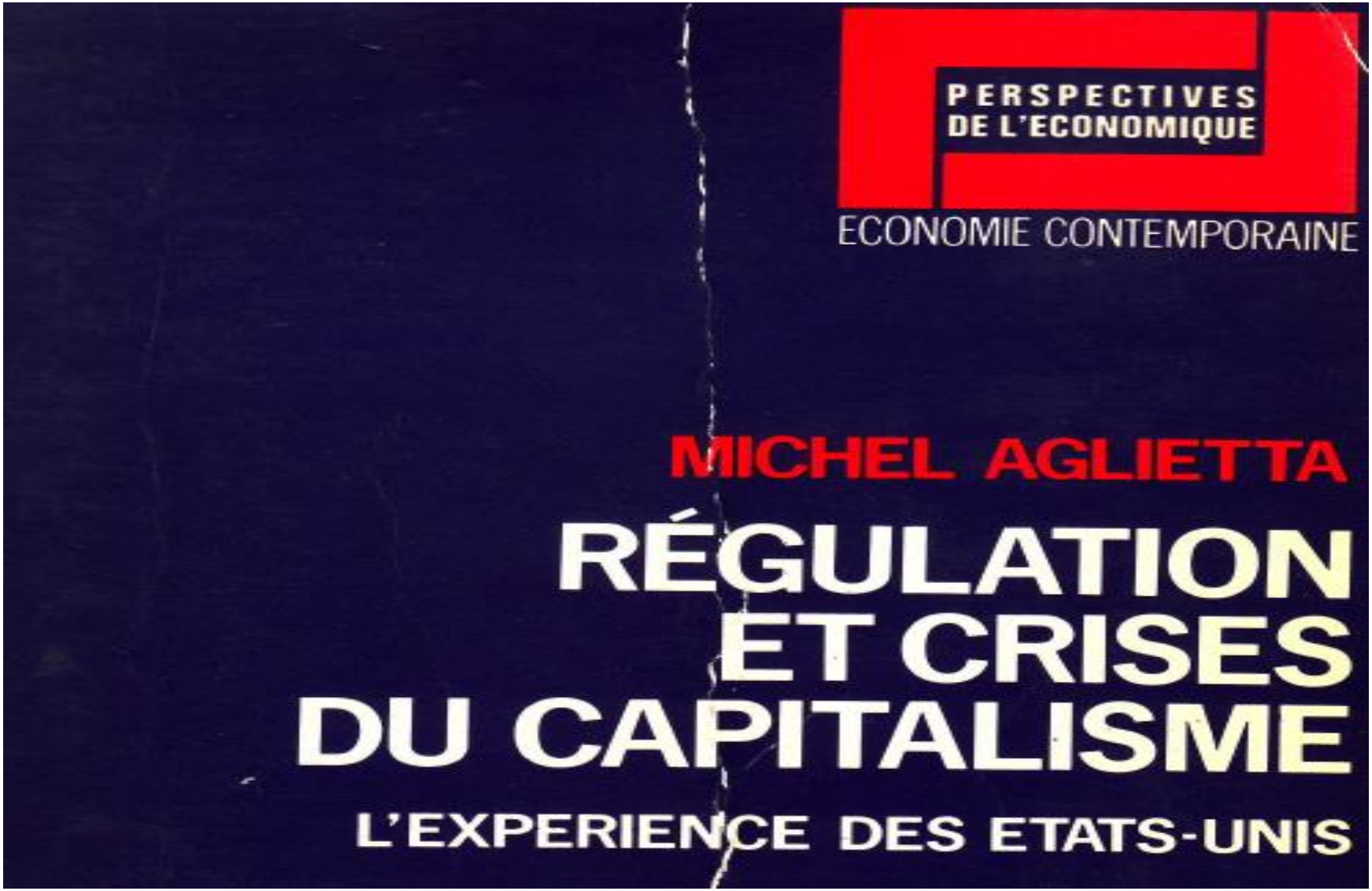
・1970sの経済危機（石油ショック、スタグフレーション）のなか、従来型マクロ経済政策（公共政策？）モデルの失効に直面したフランスの若き官庁エコノミストらによる挑戦

・ Aglietta (1976) @INSEE:『資本主義の調整と危機』
Boyer et al. (1977) @CEPREMAP:『インフレへのアプローチ』

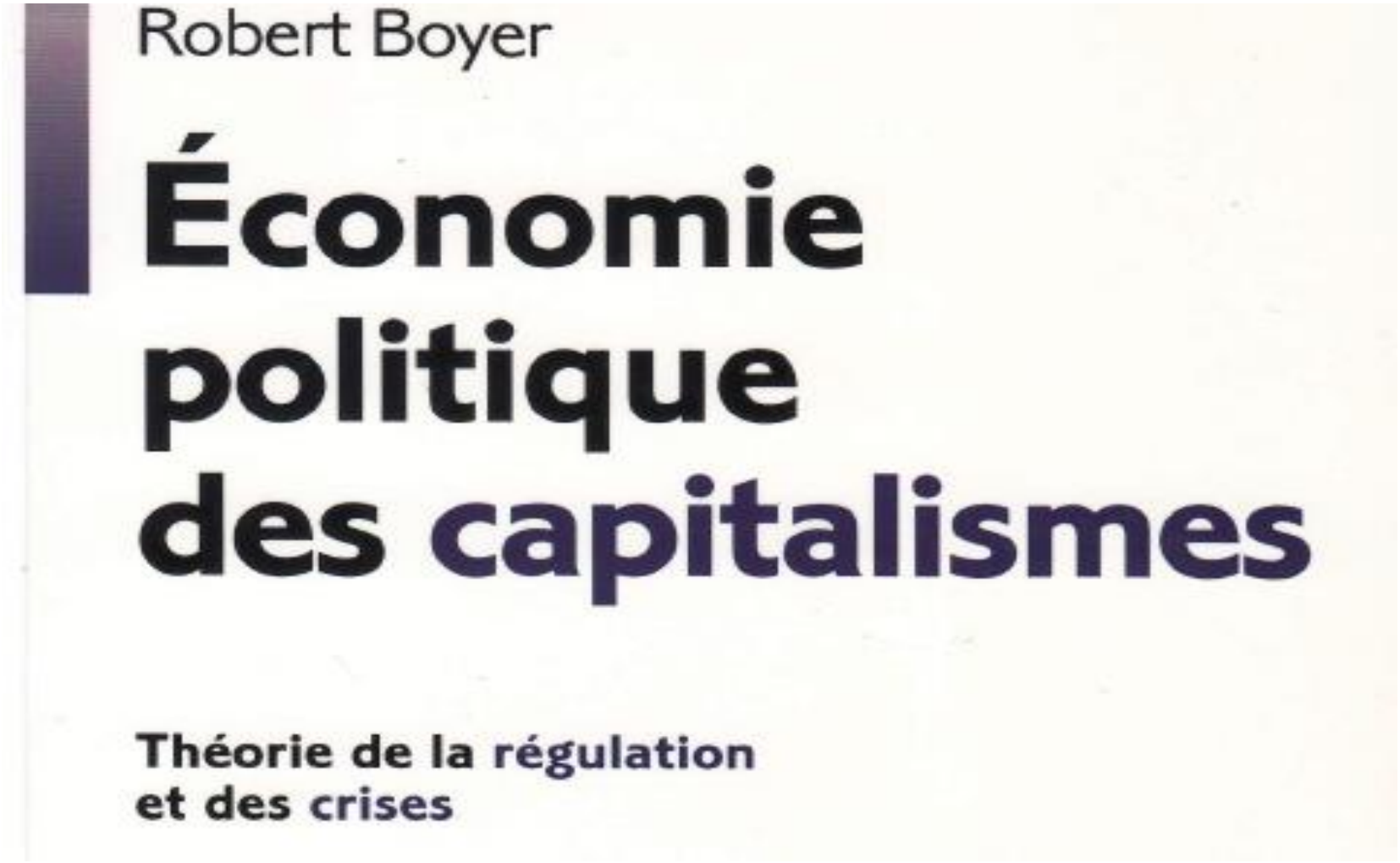
cf. Boyer (2015)『資本主義の政治経済学：調整と危機の理論』

・レギュラシオン理論：資本主義の可変性を「調整」（régulation）と「危機」（crise）の観点から問う理論

アグリエッタ『資本主義の調整と危機』1976



ボワイエ『資本主義の政治経済学ー調整と危機の理論』2015



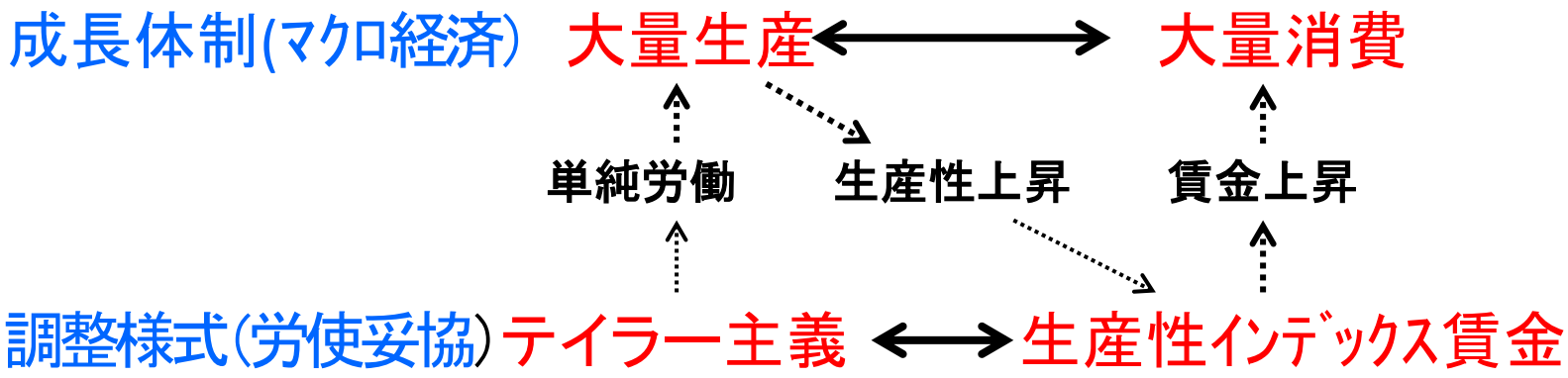
フォーディズムの成長と危機

・1970sの経済危機

「繁栄経済のなかの乱気流」（主流派経済学）か

「一つの経済システムからの断絶」（レギュラシオン派）か

・戦後欧米の高成長システム＝フォーディズム



・フォーディズム＝テイラー主義受容 対 生産性インデックス賃金提供 の労使妥協（調整様式）に支えられた大量生産・大量消費の成長体制　→　戦後的高成長のメカニズム

・フォーディズムの危機＝「成功ゆえの危機」

テイラー主義の普及→労働者の疲労・反乱→生産性の鈍化
単品種大量生産の成功→消費多様化・サービス化への不適応
ﾌｫｰﾃﾞｨｽﾞﾑ的工業化→都市化→間接賃金（社会保障）の上昇圧力
完全雇用→労働組合の戦闘性→直接賃金の上昇圧力

・ﾃｲﾗｰ主義⇔生産性ｲﾝﾃﾞｯｸｽ賃金 という労使妥協の解体による大量生産・大量消費型成長体制の崩壊

・1970sの危機は、石油価格急騰による「一時的乱気流」ではなく、もっと根源的に、「戦後的経済システム（フォーディズム）からの断絶」＝構造的な大危機

・資本主義の歴史的変化＝時間的可変性

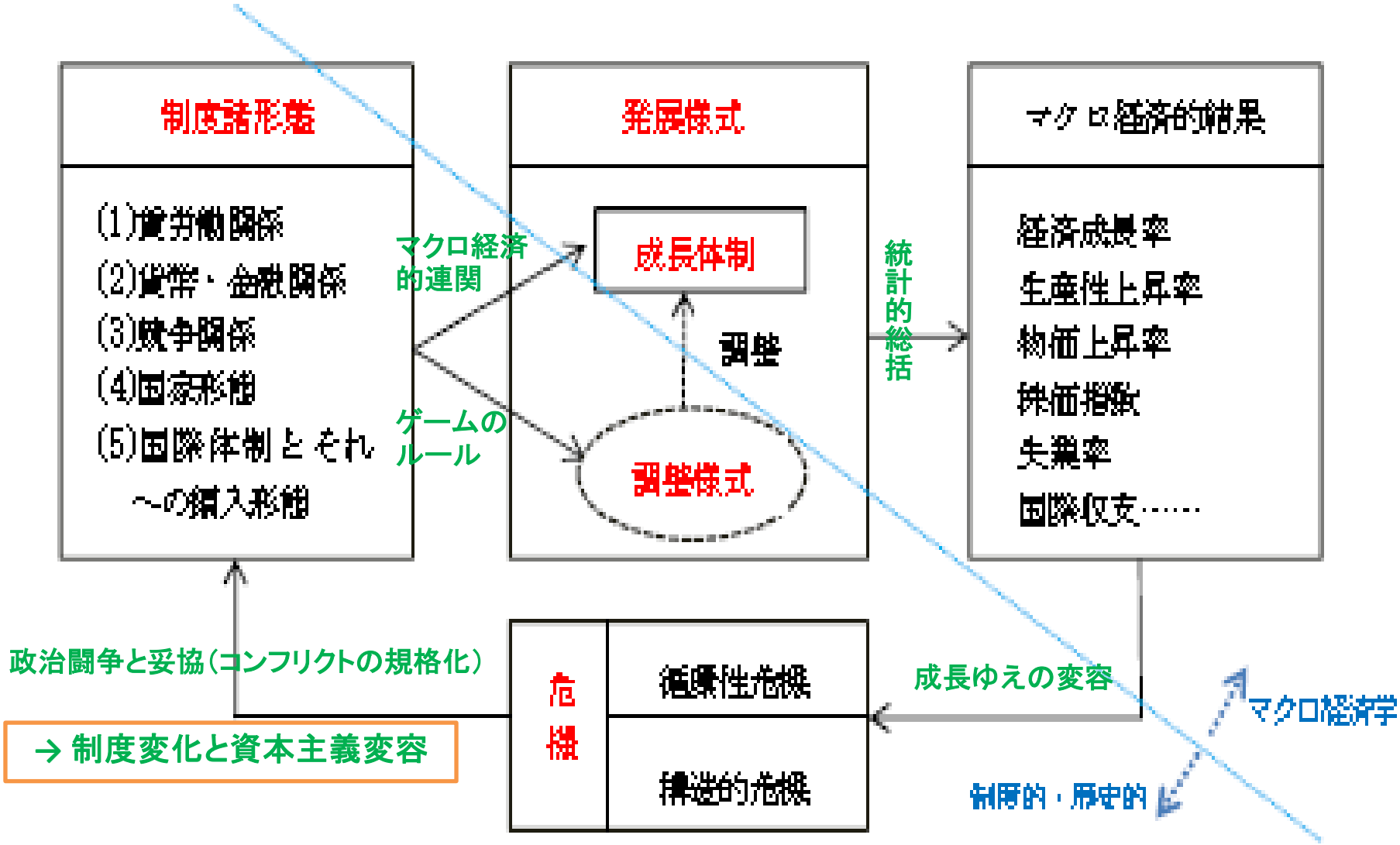
・[その後]フォーディズムの構造的危機（1970s-80s)の時代を経て→1990sからは米英を中心に新自由主義的な金融主導型経済→リーマン＝コロナショックは新自由主義の衰退の現われか

資本主義の可変性をどう概念把握するか
レギュラシオンの政治経済学へ

・フォーディズム分析→新しい政治経済学観の形成へ
・５つの基礎概念（**図表１の赤字部分**）
・経済的に重要な制度諸形態は、賃労働関係はじめ５領域
・制度総体は特定のマクロ経済連関(成長体制)を形成
・制度総体は特定のゲームのルール（規範意識）を形成。
　それを成長体制との関連でみたのが調整様式
・調整様式に支えられた成長体制は発展様式（**諸資本主義の個性**）
・発展様式の作動の総結果は各種統計指標に結実
・発展様式の成功ゆえに社会変容と危機が発生
・危機（構造的危機）のなか新たな政治的闘争・妥協
・新たな闘争・妥協は新たな規格化（制度変化）をもたらす
・制度変化の結果、新たな制度諸形態が再び生み出される

Cf. 山田(1993)

図表１　新しい政治経済学観（レギュラシオンの概念構造）



調整と危機の理論

＊資本主義の調整と危機

・**調整**→**制度**（抽象的な「合理的」個人でなく制度のもとで行動する個人）→制度はすぐれて政治的産物→制度の国民的多様性→資本主義の空間的可変性

・**危機**→**変化**（危機を通して経済社会は歴史的に変化する）→構造的大危機を理論のうちに組み込む→資本主義の時間的可変性

＊レギュラシオン理論

「歴史」と「制度」を重視する経済学

＝歴史的制度的マクロ経済学

資本主義の時間的可変性（歴史的変化）

- 資本主義（成長体制）は社会的に調整されねばならない→「自己調整的市場」なるものは幻想
- 社会的調整が良好ならば資本主義は成長
  調整不良ならば（構造的）危機
- 特定の調整様式の成功は、その成功ゆえに経済的社会的変化をもたらし、在来の調整様式は危機化
- 危機のなか、変化した経済社会に適合的な調整様式が生まれれば、資本主義は再び成長するが、そうなる絶対的保証はない→長期停滞の可能性
- 以上の運動が資本主義の時間的可変性（歴史的変化）を規定する　Cf.: 山田(2008), Yamada (2018)

資本主義の空間的可変性（国民的多様性）

・新しい調整様式（制度）は必ずしも経済合理性や経済的効率を高める方向で形成されるとは限らない

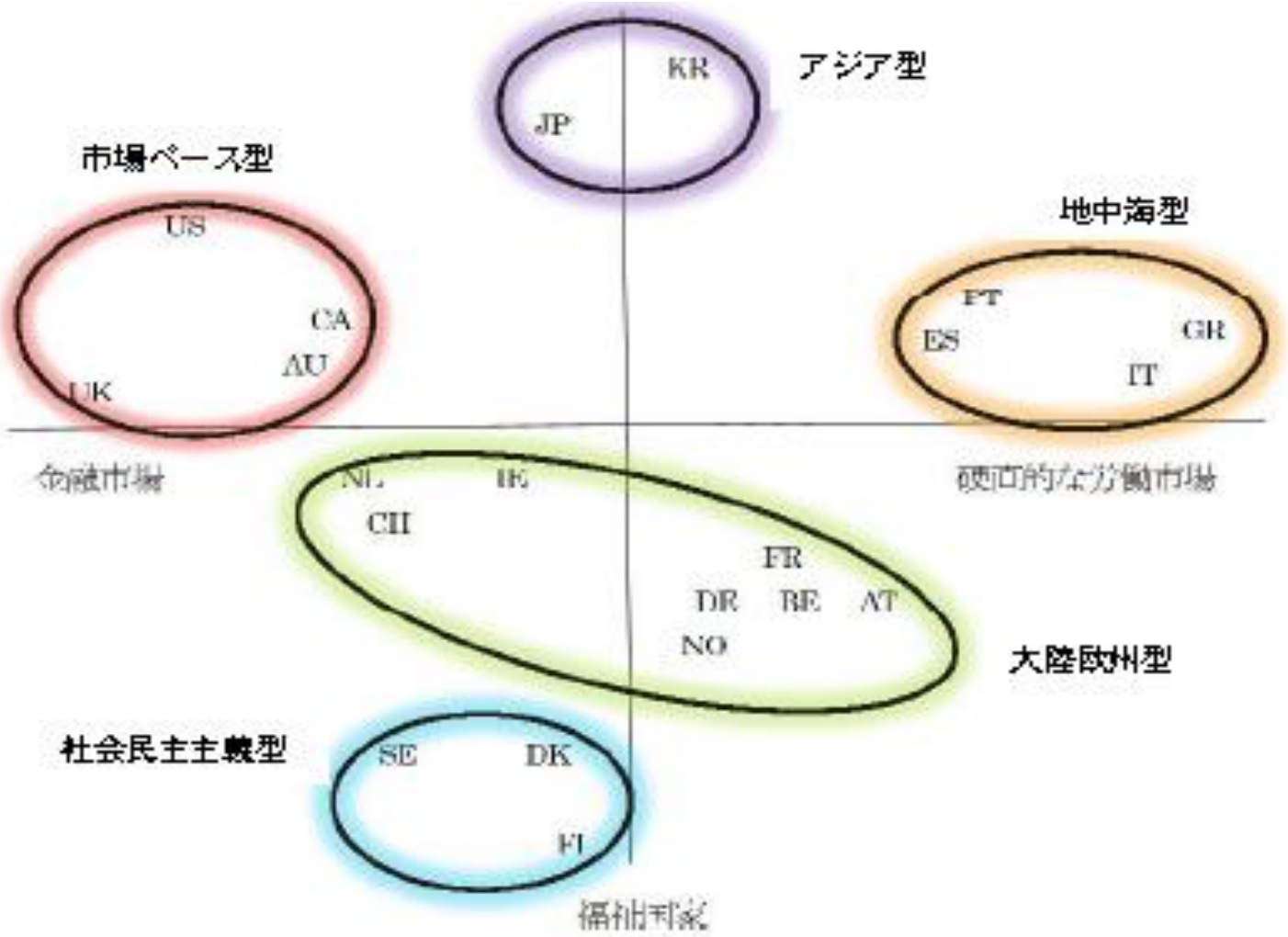
・制度形成にとって決定的に重要なのは、各種社会的勢力のもつ政治的力、および社会的諸勢力間の連合と妥協のあり方である

・政治・社会的要因は各国ごとに多様

・そこから、制度（調整）の国民的多様性が、ひいては資本主義の空間的可変性が生ずる

→レギュラシオン理論の原点：資本主義の時間的空間的可変性を問う経済学＝可変性の政治経済学

図表２　資本主義の国民的多様性の一例　(Amable 2003)



図表３　経済諸学派のなかのレギュラシオン理論の位置

経済諸学派	市場経済観（根底的仮説）	基礎概念	危機（不況）からの脱出策
新古典派	本質的に安定	均衡	市場攪乱要因（政府、労組）の排除
ケインズ派	本質的に不安定	有効需要	政府による有効需要の創出
マルクス派	本質的に矛盾	搾取	資本主義の廃止・超克
レギュラシオン派	本質的に不安定	調整	適合的な調整様式と成長体制の樹立

３　制度の政治経済学

前節２での「制度」への言及

・制度総体（制度諸形態）は成長体制（マクロ経済的連関）と調整様式（ゲームのルール）を生み出す

・制度はすぐれて政治的産物（経済効率追求の産物でない）

・制度形成にとって決定的に重要なのは、各種社会的勢力のもつ政治的力、および社会的諸勢力間の連合と妥協のあり方

・新しい制度（調整様式）は必ずしも経済合理性や経済的効率を高める方向で形成されるとは限らない

➡**制度の政治経済学**へ（「利己心と見えざる手」にもとづく市場分析中心の経済学への批判、市場もひとつの制度）

制度が重要である (Institutions matter)

・制度の存在形態

①法律・条令・条約　②協定・規程　③慣習・習俗

・制度の各種定義

支配的な思考習慣(Veblen)　自生的秩序(Hayek)

ゲームのルール(North)　ゲームの均衡(青木昌彦)

ルーティン化された行動パターン(Hodgson)

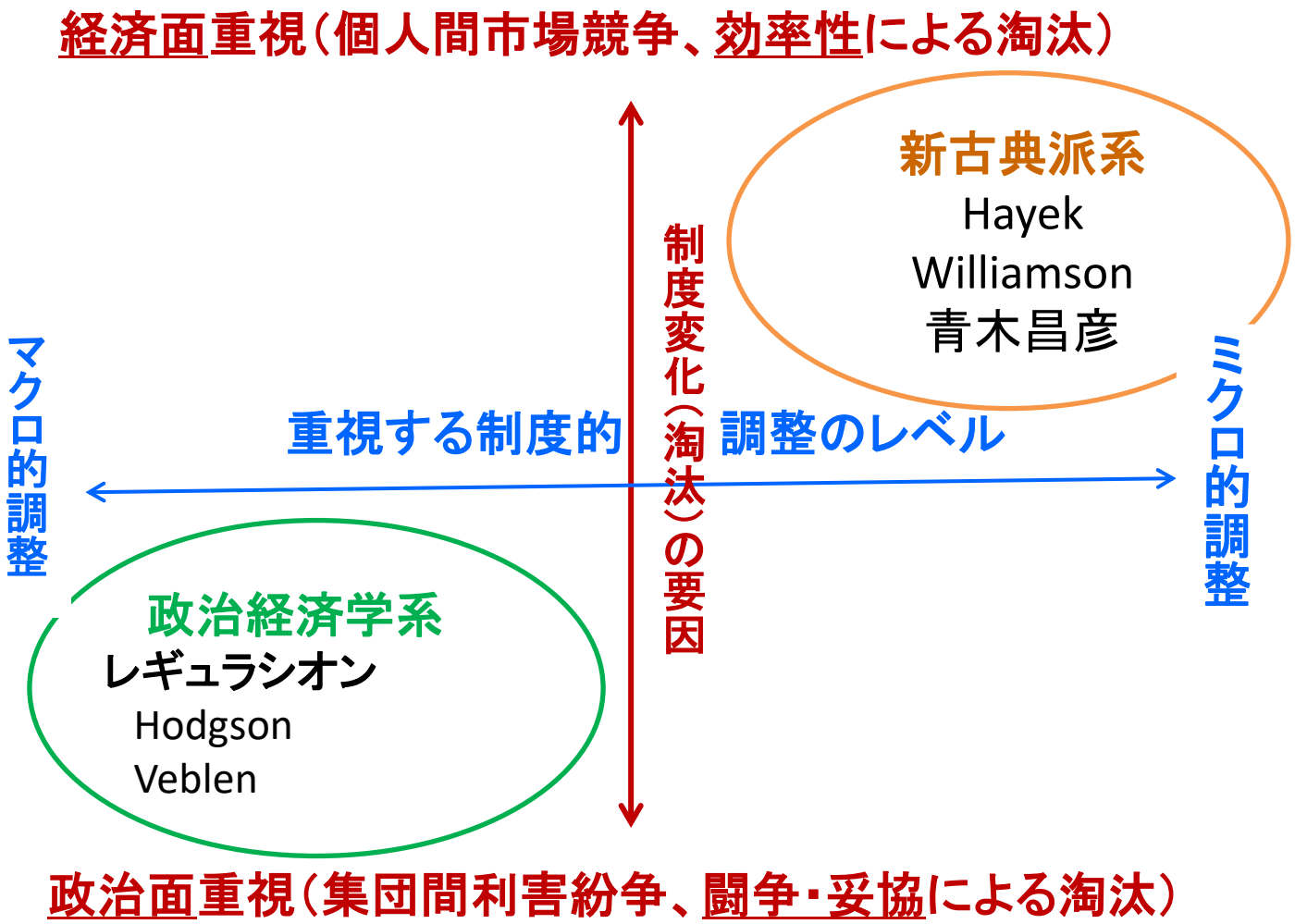
社会的コンフリクトの規格化(Aglietta)

・資本主義の可変性の基礎には制度の変化がある

➡マクロ分析から「制度」というメゾレベル分析へ

・レギュラシオンは制度変化の政治的要因を重視

図表4　制度経済学の諸潮流



制度変化の諸類型

・制度変化論についてはセーレン（Thelen 2004; Streeck and Thelen 2005)が有名。漸進的変化の強調と、重層・漂流・転用などの変化様式を提示

・しかしセーレンの類型論は制度変化の「過程」と「結果」からする分類であって（図表５）、あまり有効ではない。図表５で「変化の結果」が「連続的」だというのは、制度変化でない

図表5　セーレンの制度変化類型論　　Streeck and Thelen (2005)

		変化の結果	
		連続的	非連続的
変化の過程	漸増的	適応による再生産	漸進的変容
	突発的	存続と復帰	崩壊と置換

原因と過程からみた制度変化の諸類型

・制度変化を「原因」（内生的・外生的）と「過程」（漸進的・急進的）を軸にして以下のように類型化　（山田 2020）

図表６　制度変化の諸類型：原因と過程

		変化の原因	
		内生的	外生的
変化の過程	漸進的	A 内部代謝 制度の機能それ自体による制度の漸次的変質	C ハイブリッド化 対外的・国際的影響の漸次的浸透と混成化
	急進的	B 閾値効果 内部代謝の閾値到達による制度の内部崩壊	D 大事件 戦争、革命、国際ショック、大災害、パンデミックなど

図表６の説明

A 内部代謝(endometabolism)：長期にわたる局面の反復によって次第に構造が変形されていくこと。内生的原因による漸進的な制度変化

Cf. Boyer and Saillard (1995), Lordon(1995), Boyer (2004)

(ex)成功ゆえの危機（フォーディズム）、幼・青・壮・老（生体）

B 閾値効果(threshold effect):内部代謝が臨界点に達すると生ずる急速な変化・崩壊。内生的原因による急進的な制度変化。非線形的な転換点tipping point

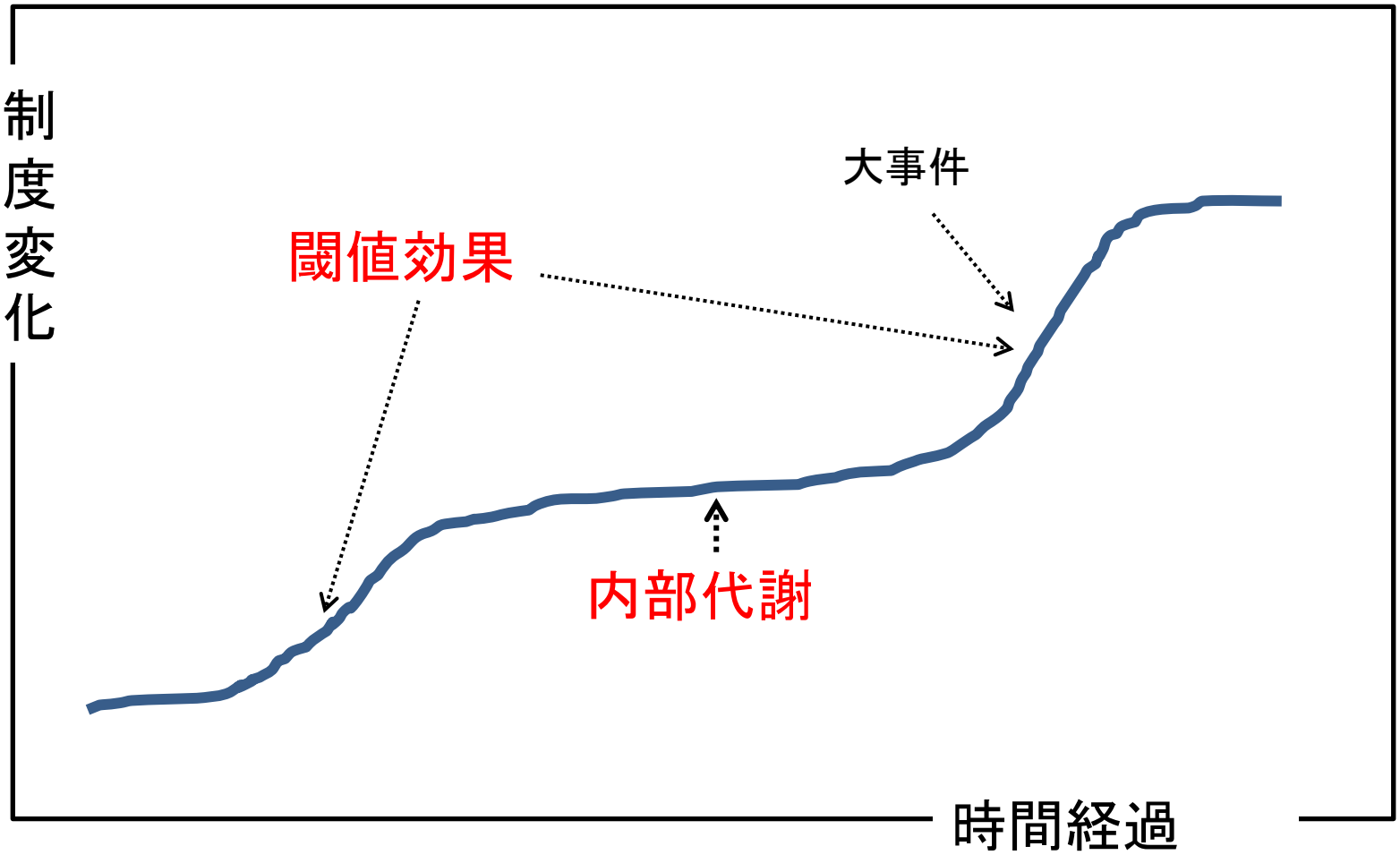
(ex)生・死（生体）、構造的危機、在来の支配的政治連合の分裂

C ハイブリッド化：外生的原因による漸進的な制度変化

D 大事件：外生的かつ急進的な制度変化

➡制度は一般に粘着的（変わりにくい）。しかし内部代謝が閾値に達したり、そこに大事件が加わると、大きく変化。大事件は既存の変化の方向性を加速させることが多い

図表７　内部代謝と閾値効果



制度階層性と社会政治連合

・以上は制度変化の一般的・外形的描写

・重要なのは、そうした変化をもたらす政治的要因、
　つまり支配的社会政治連合の組み方の変化

・「制度階層性とその逆転」という考え方

(1) 諸制度領域（制度諸形態）には、時代ごと、支配的な制度領域と被支配的なそれとがある（階層性）

・フォーディズム：賃労働関係（上位）→競争・金融・国際（下位）

・新自由主義：金融・国際関係（上位）→賃労働関係（下位）

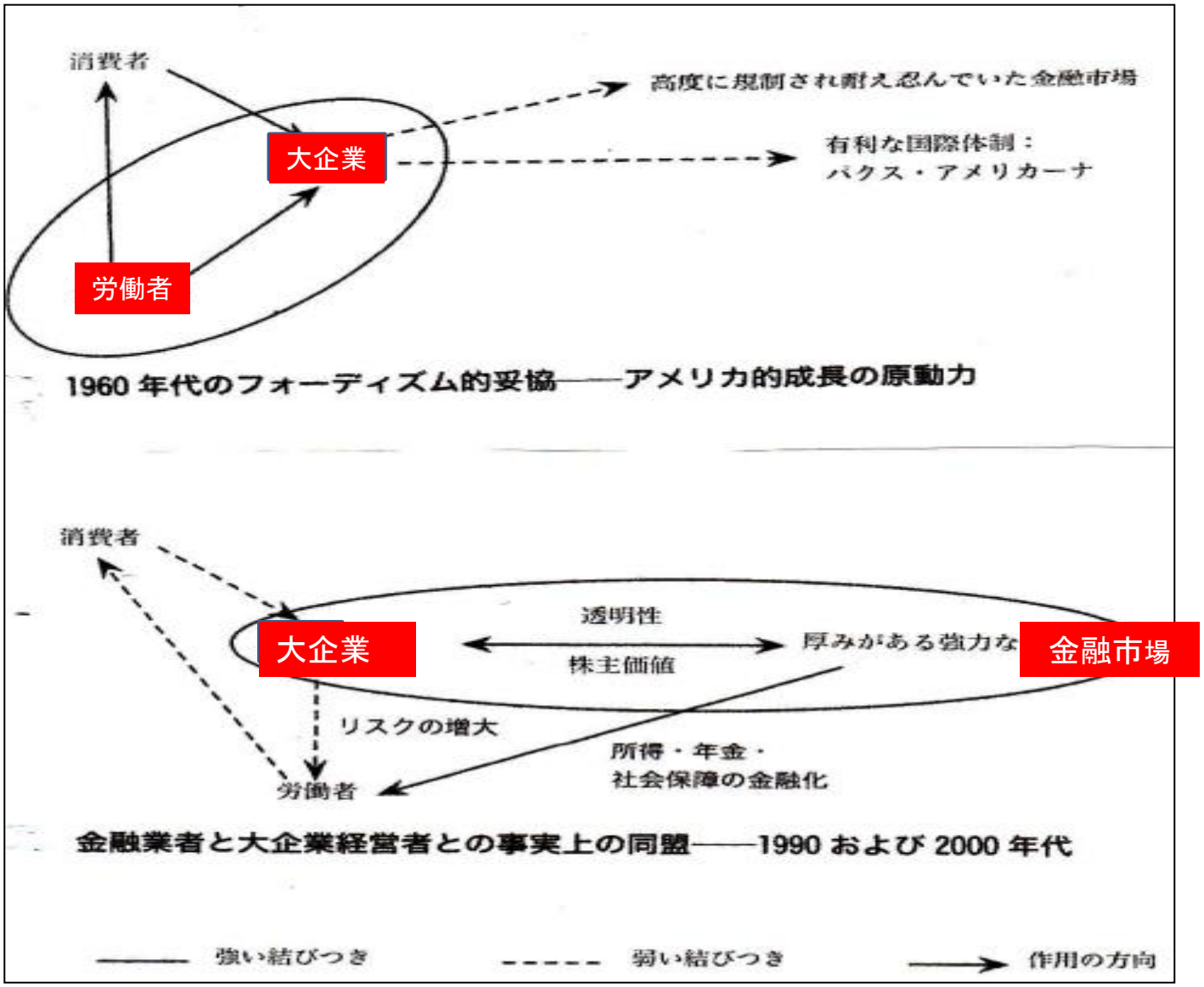
(2) 制度階層性の逆転と支配的政治連合の組替えは相互に因果関係をなす

・フォーディズム：労使連合が支配的（労使連合型）

・新自由主義：大企業ー金融連合が支配的（株主主権型）

図表8　フォーディズム的政治連合から新自由主義的政治連合へ

Boyer (2011)



支配的政治連合の組替えの背景

・脱工業化・サービス化：雇用の非正規化、雇用形態の多様化、賃金の停滞、労働組合の退潮

・グローバル化：企業の多国籍化、民衆は賃金停滞を穴埋めすべく廉価な輸入消費財に依存→多国籍企業・大型量販店への民衆の依存

・金融化：高齢化に伴う年金基金運用への退役労働者の依存、賃金停滞を穴埋めする現役労働者による金融所得（株価上昇＝capital gain）への期待→グローバル金融への民衆の依存

➡新自由主義連合の中核は経営－金融連合だが、その外周に広範な一般市民を引き寄せた

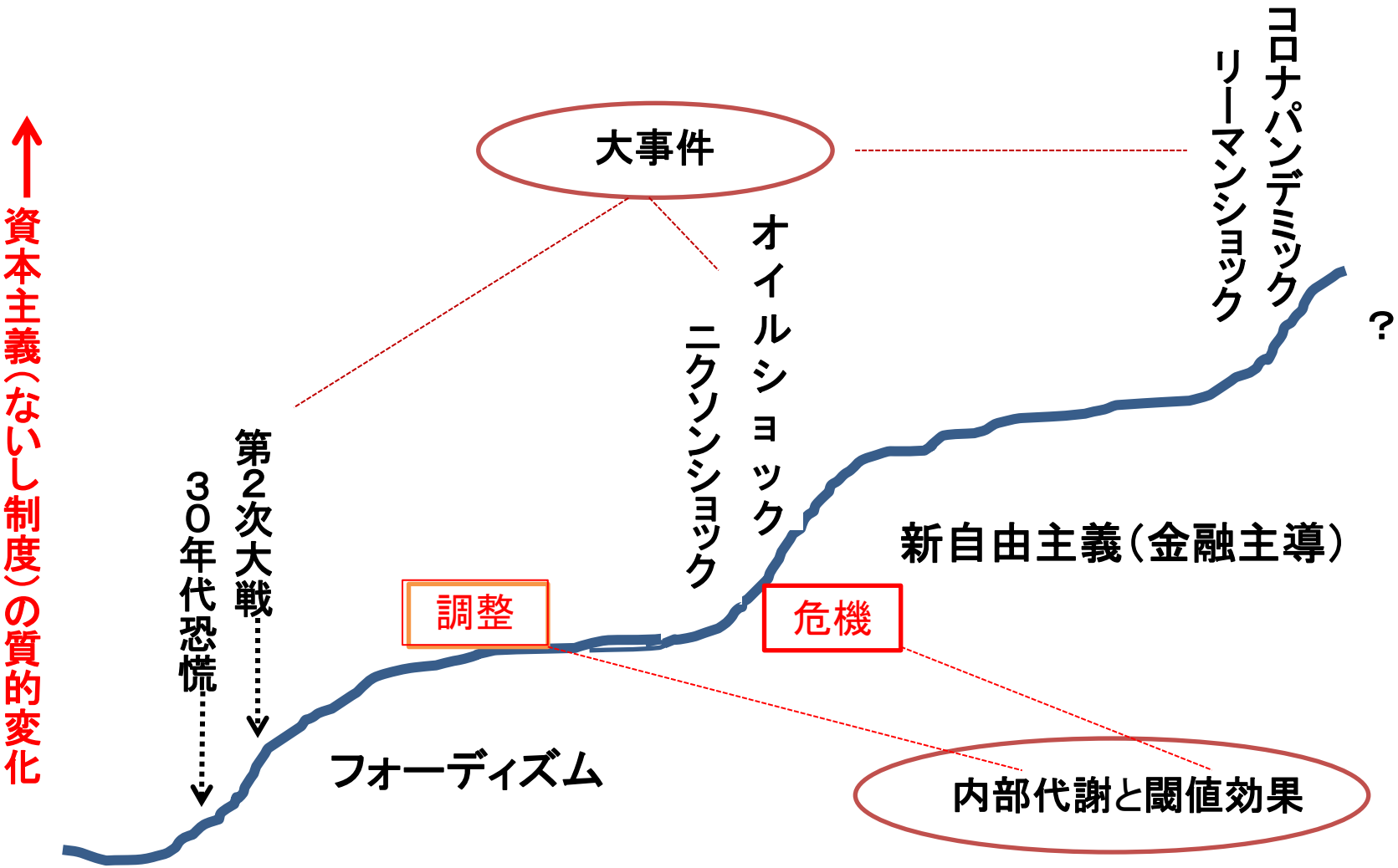
５　おわりに――ポストコロナの経済社会

コロナパンデミックの歴史的位置

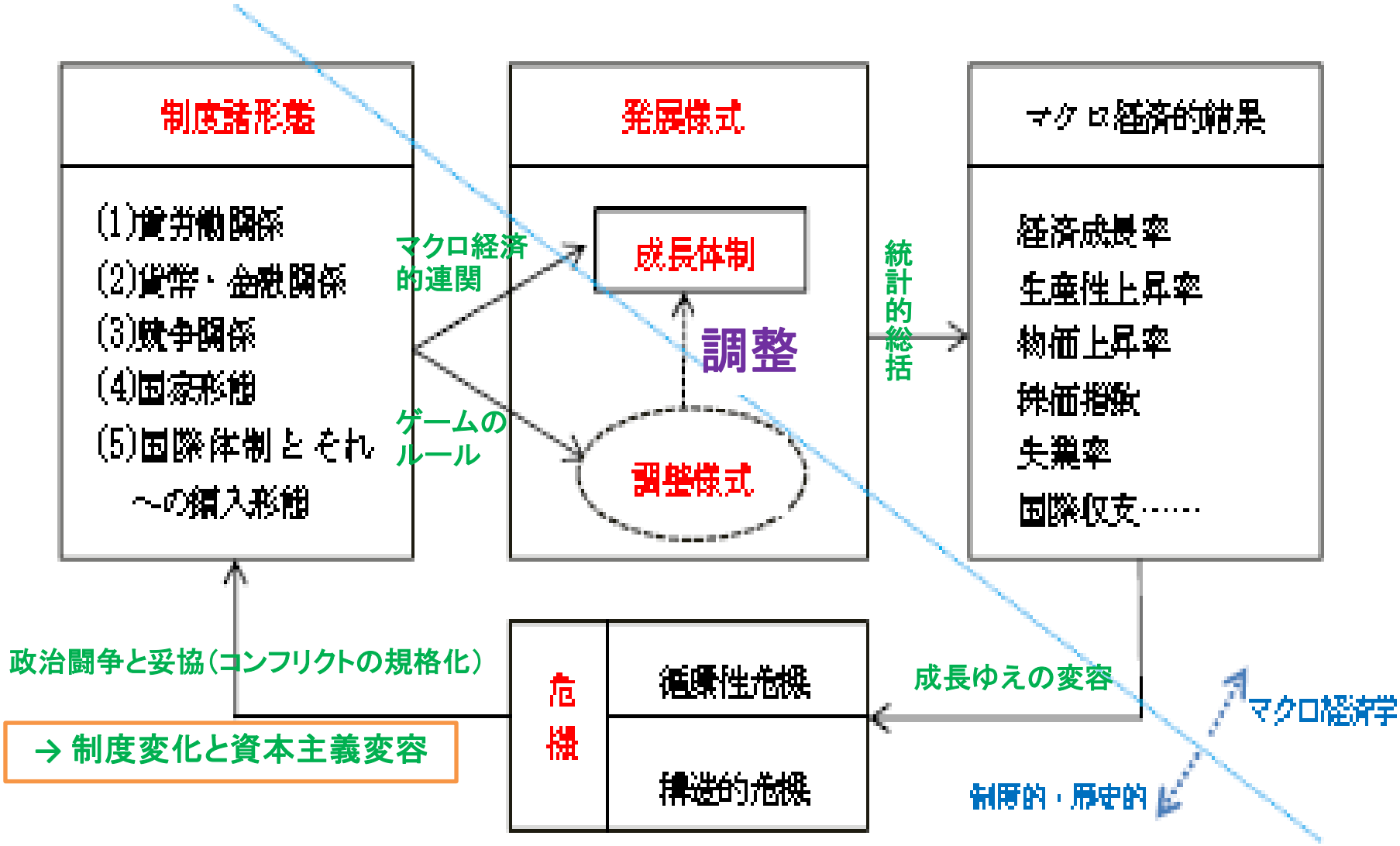
新自由主義的資本主義の構造的危機（歴史的転換点）
――「元には戻らない」「New Normal」

- グローバル化の見直し：貿易・投資額の停滞、国境閉鎖、グローバル・サプライチェーンの再検討と再構築
- 国家の復権：市場主義後退、but 排外的ポピュリズム
- デジタル・プラットフォーム資本主義の強化：監視社会化も
- 不平等のいっそうの拡大
- 新自由主義の終焉？
- 人間形成型社会の萌芽：医療＝健康、環境、教育、文化を基軸にした新しい発展様式

図表９　資本主義（ないし制度）の歴史的変化とコロナ危機



図表1（再掲） レギュラシオンの概念構造



人間形成型発展の可能性？

・感染症とは環境問題である（石 2018, 2020）
環境問題がまず感染症（健康）問題として激烈に現われた
→コロナ・パンデミックを人間形成型発展への第一歩とすべき・・・・？

・人間形成型成長体制 (Anthropogenetic Growth Regime)
健康（環境）・福祉・教育・文化を軸とした社会形成
モノによるモノの生産（フォーディズム）
→カネによるカネの生産（新自由主義＝金融主導型）
→ヒトによるヒトの生産（人間形成型） (Boyer 2020)

・知識基盤経済（AGRの一部）
有形資産から無形資産（知識資産）へ
物質的生産から非物質的生産へ
(岩井 2003;Thurow 2003; 諸富 2020; Haskel et al. 2018)

ボワイエ『パンデミックは資本主義をどう変えるか』

参考文献

Aglietta, M. (1976) *Régulation et crises du capitalisme: L'Expérience des Etats-Unis*, Calman-Lévi. 若森章孝ほか訳『資本主義のレギュラシオン理論』大村書店、増補新版 2000.

Amable, B. (2003) *The Diversity of Modern Capitalism*, Oxford University Press. 山田鋭夫／原田裕治ほか訳『五つの資本主義』藤原書店, 2005.

Boyer, R. (2004) *Une théorie du capitalisme est-elle possible?,* Odile Jacob. 山田鋭夫訳『資本主義vs資本主義』藤原書店, 2005.

—— (2011) *Les financiers détruiront-ils le capitalisme?,* [参考]山田鋭夫ほか監訳『金融資本主義の崩壊』藤原書店, 2011.

—— (2015*) Economie politique des capitalismes: Théorie de la régulation et de crise*, La Découverte. 原田裕治訳『資本主義の政治経済学——調整と危機の理論』藤原書店 2019.

—— (2020) *Les capitalismes à l'épreuve de la pandémie*, La Découverte. 山田鋭夫／平野泰朗訳『パンデミックは資本主義をどう変えるか』藤原書店, 2021.

Boyer, R. and Y. Saillard eds. (1995) *Régulation Theory; The State of the Art*, Routledge.

CEPREMAP-CORDES (1977) *Approche de l'inflation: L'Exemple francçais*, ronéo, Paris.

Haskel J. et al. (2018) Capitalism without Capital: The Rise of the Intangible Economy, Princeton University Press. 山形浩生訳『無形資産が経済を支配する』東洋経済新報社, 2020.

Lordon, F. (1995) Formalising regulationist dynamics and crises, in Boyer and Saillard (1995).

Streeck, W. and K. Thelen eds. (2005) *Beyond Continuity: Institutional Change in Advanced Political Economies*, Oxford University Press.

Thelen, K. (2004) *How Institutions Evolve*, Cambridge University Press.

Thurow, L.C. (2003) *Fortune Favors the Bold*, HarperCollins. 三上義一訳『知識資本主義』ダイヤモンド社, 2004.

Yamada, T. (2018) *Contemporary Capitalism and Civil Society: The Japanese Experience*, Springer.

石弘之 (2018) 『感染症の世界史』角川文庫.

—— (2020) 「人間の一人勝ち」はあり得ない, 日経クロステック編『アフターコロナ』日経BP.

岩井克人 (2003) 『会社はこれからどうなるか』平凡社.

諸富徹 (2020) 『資本主義の新しい形』岩波書店.

山田鋭夫 (1993) 『レギュラシオン理論』講談社現代新書.

—— (2008) 『さまざまな資本主義』藤原書店.

—— (2020) 制度の内部代謝と成長レジームの転換, in 宇仁宏幸ほか編『制度でわかる世界の経済』ナカニシヤ出版.